主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2018
graph magazine vol. 47

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 47 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt
主は生きておられる

メッセージ

4 からし種のたとえ(1) ゴットホルド・ベック

16 「みことば」との出会い(イザヤ書53章) 野田繁

8人の証し

22 あなたがたがわたしを選んだのではありません。
わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。
ローザ・グラスホーフ

33 主の憐みと恵みの中で 岩城陽子

41 「滅びの穴」から救ってくださったイエス様 大場裕之

49 主とともに生きる 岡本恵以

55 巻き物の書(聖書)に私のことが書いてあります 山本信義

64 驚くべき光の中に 山本美智子

74 主は生きておられます 室田勝美

84 天国で再会するその瞬間まで 竹本百合子

からし種のたとえ(1)

ゴットホルド・ベック

イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔(ま)くと、どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れると、全体がふくらんで来ます。」

イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話され、たとえを使わずには何もお話しにならなかった。それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。「わたしはたとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語ろう。」

(マタイ　13・31～35)

そこで、イエスはこう言われた。「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう。それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」またこう言われた。「神の国を何に比べましょう。パン種のようなものです。女がパン種を取って、三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」

(ルカ　13・18～21)

きょうは少しの間、いわゆる「からし種のたとえ」について考えたいと思います。次の三つの点に分けて考えてみましょう。

第一番目、神の国とはいったいどのようなものか

第二番目、神の国は現在どのような形で現れているか

第三番目、神の国は将来どのように実現するのか

マルコによる福音書4章からもう一箇所読みます。

また言われた。「神の国は、どのようなものと言えばよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう。それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」

イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。

(マルコ　4・30～34)

以前、私たちはひとりでに実を成らせる「植物の種」から、神の国について考えました。つまり、植物は芽を出し、生長して、実を結びます。これは、主が昇天されたあと、信じる者が天に引き上げられるまでの間の、この地上における真の教会の成長のありさまを示しています。植物が生長すると、収穫の時が来ます。主は私たちを黙って見つめておられ、私たちが成長して実を結び、天に上げられるのにふさわしくなるのを、じっと待っておられるのです。主の御目的は、エペソ書5章27節に書かれています。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の

前に立たせるためです。（エペソ　5・27）

これが主の、私たちに対する御目的です。黙示録19章7節にも、必ず達せられる主の御目的が書かれています。

私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。（黙示録　19・7）

今回は、神の国が外面的に目に見える形で、どのように生長するかについてご一緒に考えたいと思います。

始めに述べた、第一番目の問い、「神の国とはいったいどのようなものか」については、マタイによる福音書6章9～10節に記されています。

天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。（マタイ　6・9～10）

「御国が来ますように。」とイエス様は祈られましたが、この御国こそ、神の国に他なりません。神の国とは、主の御名が崇（あが）められ、主の御心が行われるところです。今日、すでに天においてはその事が実現していますが、地上ではそうではありません。ですから、イエス様は次のように言われました。

イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」（ヨハネ　18・36）

神の国は、この世とはまったく相容（あいい）れないものです。この世の国家は、ある政治形態を持っており、支配者を持っています。けれども、神の国の支配者はいったい誰でしょうか。もちろん言うまでもなく私たちの主イエス様です。イエス様の支配されているところ、そこが神の国です。人がイエス様を自分自身の主として受け入れ、イエス様の御心に従うなら、その人は神の国の民となります。神の国の国民の特徴は、常に主の御心を尋ね求めることであり、またその御心にそって歩むことを願い、実際に御心に従って歩む者であることです。

神の国の民の唯一の願いは、イエス様の御名が崇められることです。彼らは心からイエス様に対する愛に満たされており、常に主の必要に対して自分自身を備えています。このような人々は、もうすでに、天国のすばらしさを少しだけですが味わい知っている者と言えます。

からし種のたとえ（1）

次に、第二番目の問い「神の国は現在どのような形で現れているか」について考えましょう。今日における神の国の現れは、見せかけの神の国です。真の神の国は、今の世では氷山の一角のように、私たちの目に触れる形ではほんのわずかしか現れていません。神の国は、イエス様の御栄光を大切にする人々を通してのみ現されます。

今日、私たちの目を奪うものは大部分が悪魔の業です。イエス様によると、この世の支配者は悪魔です。人々は、人間が成し遂げた事柄を驚嘆の目をもって見つめています。その人間の業の一つが、いわゆる宗教です。キリスト教もその意味では、宗教の一つに成り下がってしまったと言わざるを得ません。けれどもイエス様は、このようないわゆる「キリスト教」の将来をも、完全に見通しておられました。そのため、からし種のたとえを語られたのです。

イエス様は、宗教としてのキリスト教は、からしの

木のようにめきめきと生長して大きくなる、と言われました。今日、宗教としてのキリスト教は、経済的にも社会的にも政治的にも、大きな権力を持つ世界宗教の一つとなっています。それは人々の目を驚嘆させるに充分なほどの、巨大なものに生長しました。けれども、それは上辺（うわべ）だけで、うどの大木のようにその中には力も強さもありません。

からしという植物は、本来それほど大きな植物ではありません。ところがここには、からしの木は、非常に大きく生長していくと書かれています。それは、キリスト教が宗教へと堕落し、その精神を失って異常な発展を遂げるありさまを示しています。カタコンベ（古代ローマの地下墓地）に集っていた初代教会は、次第に霊的に堕落することによって、この世と妥協していった結果、世的な権力を持つようになりました。その結果が、ヨーロッパにおける大聖堂の建築という形で現れています。その堕落は、木の様子と鳥によって現されています。木の生長とは、人間のなした大きな業を象徴的に表わしています。これは神の意志とは相容れないものです。本来小さな植物が、単に見かけだけ大きな宗教としてのキリスト教になりました。このキリスト教は、黙示録17～18章に書かれているように、世的な権力として「大バビロン」と呼ばれるようになります。鳥は、聖書では常に悪魔、サタンの業を示しています。マルコによる福音書4章4節と15節を見てみましょう。マルコによると、鳥は蒔かれた種、つまりみことばを取り去るものとして語られています。

> 蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。
>
> （マルコ　4・4）

みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです――みことばを聞くと、すぐサタンが来て、

> 彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。
>
> （マルコ　4・15）

これと非常によく似た内容の箇所が、旧約聖書にあります。エレミヤ5章26節から読みましょう。

それは、わたしの民のうちに、悪者たちがいるからだ。彼らは、待ち伏せして鳥を取る者のように、わなをしかけて人々を捕える。鳥でいっぱいの鳥かごのように、彼らの家は欺きでいっぱいだ。だから、彼らは偉い者となって富む。彼らは、肥えて、つやつやになり、悪事に進み、さばきについては、みなしごのためにさばいて幸いを見させず、貧しい者たちの権利を弁護しない。

これらに対して、わたしが罰しないだろうか。――主の御告げ。――このような国に、わたしが復讐しないだろうか。恐怖と、戦慄（せんりつ）が、この国のうちにある。預言者は偽りの預言をし、祭司は自分かってに治め、わたしの民はそれを愛している。その末には、あなたがたは、どうするつもりだ。

（エレミヤ　5・26～31）

ここで鳥は、悪魔が与える欺きの象徴として出てきます。また、偽りの預言をする預言者と自分勝手に治める祭司とがいて、人々はそれに対して抵抗することなく、かえってその悪を愛していると書かれています。

からし種のたとえでは、鳥は生長したからしの木の枝に「巣」を作ると書いてあります。つまり、偽りを預言する預言者や自分勝手に治める祭司は、木であるキリスト教に住まいを持つのです。悪魔は、宗教としてのキリスト教を嫌いません。今日のドイツの神学校の教授たちの大部分は、無神論者です。彼らの役目は、学生の心から、みことばの種を取り去ってしまうことです。このたとえ話によって、イエス様は、ご

からし種のたとえ（1）

自身が天に昇られた後でキリスト教がどのような姿になるかということを語られたのです。

イエス様がこの地上に来られたことによって、神の国の種が蒔かれました。そして主イエス様が昇天されるとき、そのありさまを見た者は、十一人の弟子達だけでした。これを人間的に見れば、主は、わずかな成果しか収めなかったと言わざるを得ません。しかし、イエス様の死と復活によって蒔かれた種は、必ず時至れば実を結びます。この世という畑に蒔かれたのは、ただ一粒の種でした。けれど十一人の弟子達は、全世界に出て行って福音を宣べ伝えるという使命を与えられました。イエス様は、神の国のありさまをこのたとえによって示され、それは、始めはあるかなきかのようであるにもかかわらず、終わりの時にはすばらしい実をもたらすというふうに言われたのです。

イエス様が蒔かれた種は、小さくはありますが混じりけのない種でした。一方、今日人々がキリスト教であると思いこんでいるものは、人間の目には偉大なものに見えるかもしれませんが、純粋ではありません。

ここで私たちは、初代教会において、人々がどのように集会に導かれたかということと、今日、人々がどのようにしてキリスト教に入り、いわゆる会員になって、制度としてのキリスト教の一端を担(にな)うようになるかを、比較して考えたいと思います。

初代教会において、信者となった人は必ず、まず悔い改め、二番目に信仰、三番目に従順を信者になった証しとして持っていました。これら三つの事柄が意味するものは何だったでしょうか。まず悔い改めは、三つの内容を持っています。それは「自分自身を主の光に照らして見ること」、「自分自身の罪を認めること」、「その罪を告白すること」です。自分自身を主の光に照らして見るということは、みことばは光であるという確信を持つことです。聖書は、人間には何一つ善いところがないと語っています。この事柄に対して、私たちは心から同意しなければなりません。ダビデも、自分自身が罪人であるということを、はっきりと認めたことが聖書に書かれています。

ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。」

(2サムエル　12・13)

ダビデは、民を数えて後、良心のとがめを感じた。そこで、ダビデは主に言った。「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。私はほんとうに愚かなことをしました。」

(2サムエル　24・10)

悔い改めとは、自分自身が罪人であるということを認めることです。ヨブも次のように言っています。

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

(ヨブ　42・5～6)

そして、まことの悔い改めは、人を罪の告白に導きます。ダビデの告白を見ると、それがわかります。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

(詩篇　32・5)

次に、救いに至る信仰とは、いったいどのようなものでしょうか。まことの信仰もまた、三つの内容を持っ

からし種のたとえ(1)

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

（ヨハネ　1・12）

信仰とは、事柄を「教理」として信じるのではなく、「イエス様ご自身」を受け入れることなのです。イエス様を無条件に信頼することです。イエス様も、ご自分では何一つすることはできない、父なる神の御心を行うだけであると告白なさいました。まことの信頼とは、自分の思いによって歩むのではなく、主の御心を求めて、主の御心だけを行うことを切に望み、主の御手にゆだねて歩むことです。

信者となった者は前に述べたように、まず悔い改め、二番目に信仰、三番目に従順を信者の証しとして必ず持っています。三番目の従順もまた、三つの内容を持っています。それは、「イエス様の歩まれたように歩むこと」であり、「自分自身を無にすること」でています。「主を見上げること」、「主を受け入れること」、「主を信頼すること」です。

まず、信仰とはイエス様に向かって目を上げることです。ヨハネによる福音書1章29節を読みましょう。

その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

（ヨハネ　1・29）

十字架につけられた、身代わりの小羊であるイエス様を、自分自身の死、また罪を取り除いてくださった救い主として見上げ、またその御わざに感謝を捧げる者は、救いに至る信仰を持っている人です。

次に信仰とは、イエス様を意識的に受け入れることです。ヨハネによる福音書1章12節にこう書いてあります。

あり、「イエス様の来る時を待ち望み、そのための備えをすること」です。

このまことの悔い改め、混じりけのない信仰、また幼子のような従順は、初代教会の信者たちの特徴でした。当時の人々は、このような悔い改めと信仰と従順によって、集会すなわち信者の群れに加えられました。ですから、彼らには喜びがあり、確信があり、主のために苦難を忍ぶ用意がありました。

ところが、後の時代になってキリスト教がローマ帝国の国教に定められるようになると、人々は強制的に剣で脅（おびやか）されながらバプテスマを受けさせられ、宗教としてのキリスト教に信者として加えられたのです。

今日もまた、多くの人が洗礼を受け、自分はクリスチャンであると思い込んでいます。洗礼を受けた者は救われた者である、と多くの教会は語っています。けれども聖書の語る洗礼とは、まず、信仰があり、それに罪の赦しの確信が続き、その結果として人々への信仰の証しとして行われるものです。この順序を正しくわきまえないために、多くの教会では信者と未信者の区別がつかなくなってしまっています。このようにすれば、信者数は無制限に増加するでしょうが、霊的にはまったく堕落してしまうのです。

今日の教会を特徴づけるものは、偉大な権力と富でしょう。そこには、初代教会の慎み深さや貧しさを特徴とした小さい群れの面影はありません。その偉大な富と権力に人々は目を奪われ心を動かされますが、そのことによって主を知るようになることはありません。

みことばこそ、唯一の主への確信の土台であり、キリスト者を導くものであるという確信を、初代教会の兄弟姉妹たちは持っていました。けれども、今日のいわゆるキリスト教会は、みことばを人々の心から、鳥が種を奪い去るように取り去ってしまう働きをして

からし種のたとえ（1）

います。

今や教会は、悪魔に奉仕しているということができます。人間の働きや能力が重要視されれば、その教会はからしの木のように、異常な生長をもたらします。自分自身がある役割を演じたいと思う気持ちや、人々に認められたいという気持ち、また偉くなりたいという気持ちは、主の御心をそっちのけにしてしまい、もはや聖霊が働くことができません。ラオデキヤの教会は、この典型的な例でしょう。黙示録3章17節を読みます。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

（黙示録　3・17）

今日のキリスト教もまた、同じようになっているのではないでしょうか。つまり、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もない、大きなからしの木のようになったと心の中で思っていないでしょうか。今日のキリスト教と言われているものは、聖書の語っている神の国ではありません。

神の国は人の力で作られるものではなく、神の国とは、実際にはイエス様を心から愛し、仕え、また神の国とその義を第一にする人々の中で実現されています。

ですから、私たちは、自分自身の心に質問してみる必要があります。

私たちの心の王座を占めているものは、いったい何でしょうか。私たちは、本当にイエス様を愛しているのでしょうか。私たちのなすべきことは、すべてイエス様に対する奉仕の気持ちから行っているのでしょうか。あるいは、自分自身の思いで頑張っているのでしょうか。私たちは、本当に神の国を求めているのでしょうか。つまり、イエス様の御心がこの地上でなされることを、第一の喜びとし、イエス様の御名が崇められ、イエス様だけに栄光が帰されることを望んでいるのでしょうか。

（以下、次号に続く）

からし種のたとえ（1）

「みことば」との出会い（イザヤ書53章）

野田 繁

集会に行くようになってから数年後、アメリカに出張をしたときのことでした。シカゴから日本に帰る便で夕食をとったあと、何となく眠いけれども寝付かれず、持ってきた聖書を開き、読み始めました。しばらくしてお隣りの方から声をかけられました。

「聖書を読んでらっしゃるのですか？」

「はい、そうです」

それが会話の始まりでした。シンガポール経由で祖国に帰り、学業終了とともに職に就く帰途のようでした。英会話がほとんどできない私が、なぜかそのときにかぎり流暢に英会話ができて不思議でなりませんでした。いろいろなことを聞いたあと、私は「聖書のどこが一番心に留まりましたか？」と質問しましたら、即座に「イザヤ53章です」と答えてくださいました

「どうしてですか？」と言う私の質問から、信仰に導かれた経緯とこの「みことば」のすばらしさを丁寧（ていねい）に語ってくださいました。そのとき、心の中がとても温かくなり嬉しくなるのを覚えました。

そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明してくださった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」（ルカ 24・32）

私にとって大切な一期一会（いちごいちえ）のときでした。私は喜びをもって主に感謝し前向きに信仰を歩むべく背中を押された思いでした。

私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からの け者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかったが。

しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正

しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。

それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。（イザヤ　53・1～12）

イザヤ書は、特に後半がバビロン捕囚からの解放、そしてイスラエルの回復に触れていて、キリストの贖（あがな）いと終末の時を示す新約聖書の流れと重なるように受け取れることから、イザヤ書53章は福音的なメッセージとして多くの人たちに親しまれてきました。

主は何のために人を創られ、また、なぜひとり子イエスが十字架にかからねばならなかったか、その問いに53章は分かりやすく答えています。アダム以来、主に背を向けて生きてきた負の部分に、十字架は、すべての原因が私たちの生まれつきの性質によって起こってきていることをあらわにしました。「罪人」として重い負荷をもっての人生に対し、主は、イザヤを通して罪をまったく犯さなかったイエス様が私たちすべての者のために殺された、とあるように、イエス・キリストに人間のすべての背きの罪を負わせた、とあります。何でもできる方が何もせず、ただ父のみこころに従い、仕組まれた不正の裁判にも抗弁せず、ゴルゴタの丘に向かわれました。ただただ驚きです！キリストの十字架の「事実」によって、神を知らなかった私たちに「神ってこういう方ですよ」と写しだしている姿です。

これまで、主は、長い間にわたって人間の本質をあらわそうと「律法」を提示してきました。確かに律法は神様のみこころであり、聖く正しいものですが、人間にそれを行う力がなかったのです。そして人間

をその罪から救い出すために、主は、イエス様の砕かれ痛められる姿を喜ばれました、とあります。

しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。（イザヤ　53・10）

この世界に来られたイエス様は先ず悪魔の誘惑を受けられましたが、すべて父なる神に従い、聖霊の支配から外（はず）れませんでした。そしてどれ一つとして無駄な歩みはなく、神のみこころを表すものでした。さらに、神という強いイメージはないものの、私たちの苦しみ悲しみをいつも受け取っての歩みでした。

例えば、嫌われ、誰にも相手にされず絶望している人に近づかれたこと（ザアカイ）。

罪を犯し続けて、どうしようもない人のそばに行き、その人の罪を引き受けられたこと（マリア）。やもめとなった母親の一人息子が死に、悲しみにある母親を探し見つけて、施されたこと。中風の人の病を治す前に、一番大切な「事」（罪の赦し）をなされ、それから、病を癒されたことなど。私たちの心に響くことばかりでした。そして、ゴルゴタの丘での十字架上での最後の言葉は「完了した」という一言（ひとこと）でした。何一つ罪を犯されなかったイエス様がすべての人の罪を贖う瞬間でした。

信仰は、本当は自分は何もできない者であることを心の内に認め、イエス・キリストが自分のために十字架につけられたこと、甦（よみがえ）られたことを、恵みによって受け取ることから始まるでしょう。その十字架と甦りを通して、人間に必要な愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、自制、柔和、などを与えてくださるためでした。そして、今もご自分に近づく人を完全に救い、ご自分の子としてとりなしてくだ

「みことば」との出会い（イザヤ書53章）

さっています。

したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・25）

甦られたイエス様は今も生きておられ、信じる一人ひとりを守り導いてくださっています。ですから、多くの手紙を書いたパウロは、ローマ人への手紙の中で、イエス様を望みの神と呼び、次のように書いたのです。

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。

（ローマ　15・13）

主が人を創られた目的は、その「子」たちを通してご自分の栄光を表すためでした。けれども人間の実態はあまりにかけ離れたものであり、悪魔の動きに翻弄（ほんろう）されてきたのです。ゴルゴタで流された血潮は、神と人との隔（へだ）てを壊し、イエス・キリストを信じる者に赦しと新しい命を注ぐ働きをしてくださいました。人間がどんなに努力しても、どんなに知識を積んでも、自分を変えることができない、それが十字架の答でした。

イザヤ書は今から二千五百年以上も前に書かれた文章です。私たちを取り巻く環境は大きく変わって、聖書は、今は終わりの時と表現しています。と同時に、今は恵みの時ともあります。主の忍耐はいつまでしょうか？

もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。

（ローマ　9・22）

主が十字架を通してあらわされた「救い」を、一日も早く恵みによって受け取られますようお奨（すす）めします。

機内の貴重なひと時は、「私は、正しい」という思いを根っこから覆（くつがえ）すものであり、すべての解決が十字架にあることを学び始める時になりました。十字架を受け入れるまでは、「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、」（エペソ 2・1）とあるように霊は死に、生まれつきの古い肉の性質が生きているため、気づかずに何でもしてしまう、一方、十字架を信じた後は、霊は生きたものとなり、主との交わりが戻り、御霊（みたま）が内なる人として働くようになりました。

大事なのは新しい創造です。（ガラテヤ　6・15）

日々が守られ、必要を満たす主に、心から感謝と賛美を捧げます！



野田繁（吉祥寺集会）

「みことば」との出会い（イザヤ書53章）

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

ローザ・グラスホーフ



上が召された息子さんのアレクサンダー兄とご家族、下前列中央がローザさん、みなさんと

私は、主イエス様が、私たちのような者を選んでくださることを不思議に思っています。主はぶどうの木で、私たちはその枝です。私たちは主にとどまっている特権をいただいています。ですから、主にとどまってさえいれば、私たちの農夫であられる天の父に栄光を帰する実を結ぶことになります。

私はカトリックの家庭に生まれ育ちました。カトリック教会だけが本物の教会であると教えられていました。私たちはただ暗記した祈りを知っているだけでした。私たちの家には聖書はありませんでした。ですから、私たちの信仰は伝統に基づいたものにすぎませんでした。私は、教会の特別な祝日に歌った忠誠の歌を思い出します。このような歌詞です。

私の洗礼の絆（きずな）は固く、私は教会に聞き従います。
教会は、いつも私が忠実にその教えに従っている

のを見るでしょう。

カトリック教会の教えの一つとして、私たちは心配事を神様の前に持っていく聖人を必要とします。どの問題にどの聖人が責任を持ってくれるかを知らなければなりません。最善の執（と）り成し手は聖マリアでした。カトリック教会によれば、神様の母マリアにイエス様は従わなければならないのでした。

私は八歳になったばかりの頃、私たちと異邦人の違いはいったい何だろうと思いました。異邦人は彼らの要求に応じて特別の神々を持っていましたし、私たちにはさまざまな聖人がいました。そこには答えは見出されませんでした。

もう一つの問題は次の教えでした。イエス様は私たちの心の中に住みたいと思っておられる。だから、司祭に罪を告白して、心の中をきれいにしておかねばなりません。でも、これは土曜日、教会の告白室が開いている時だけしかできませんでした。人が罪を告白する時、いろんな悔い改めの祈りをしなければなりません。魂から罪が取り除かれるために熱心に祈らなければなりません。私にはそれはできませんでした。ですから、いつも心に罪の重荷を持って、家に帰るのでした。

また、もう一つの教えはこうです。司祭は、ミサの間に小さな一切れのパンを本当のイエス・キリストの生きた体に、ワインを本当のイエスの血に変えることができる。このパンを食べるとイエスが心の中に入りますが、それは二十四時間だけなのです。通常、ミサには毎日出席しなければなりません。これが、イエス様がともにおられることを知る唯一の方法なのです。

子供の頃、私は不謹慎にもこんなことを思いました。イエス様は私の口を通して私のところへ来られ、二十四時間しか私のそばにおられない。私を離れて行かれる時は、どっちの道を行かれるのだろう。そんな質問はとても怖（こわ）くてできませんでした。こ

れが、カトリック信仰のいくつかの例です。

私の母が亡くなった後、父は再婚し、一番下の妹を連れて、遠くの小さな村へ越して行きました。十七歳の妹と十八歳の私は置いていかれました。その頃、私の家の半分を五人の子供のいる家族に貸していました。彼らは本物の信仰者で、私たちを幕屋伝道の集会へ招待してくれました。それが、初めて福音を聞いた時でした。私の心に何か触れるものがありました。しかし、私は回心することを恐れました。私はカトリックの教義にとらわれていたのです。しかし、天のお父様は御子イエス様のもとへ私を引き寄せ始めておられたのです。

わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。

（ヨハネ　6・44）

その家族は私に聖書をプレゼントしてくれました。それはカトリック教会に認められたもの（注1）でした。私は、それを読み始めましたが理解できませんでした。それで、読むのをやめてしまい、また別の本物のクリスチャンが私を教会に招いてくれるまで、ほぼ十二年かかりました。

その間、私は二人の子供のいる男性と結婚しました。私は二十五歳で、八歳の男の子ユルグと七歳の女の子ミヒャエラの母親になりました。四年後、私たちの子供が産まれましたが、その一年後夫は離婚を要求しました。彼には子供を育てる意志がなかったので、私は彼の二人の子供と合わせて三人の子供を引き続き育てる決心をしました。

ユルグは、父親に捨てられたせいでいろんな問題を引き起こしました。しばしば私たちは近所の人々にあやまらなければなりませんでした。そのうちの一人が本物のクリスチャンでした。私は彼らのお招きに応じま

したが、それはこう考えたからでした。「あの人たちも、いずれ私と一緒にカトリック教会に行くことになるでしょう。あんなにいい人たちが異端の教会に行っているなんて！私が彼らをそこから救い出してあげよう」

彼らは、彼らの読んでいるのと同じ聖書（注2）をくださいました。私は思いました。「よし、これで比べることができる。彼らの聖書はきっと彼ら独自のものに違いない。もし彼らが真実を知らないことを私が指摘してあげたら、神様への正しい道を見つけることができたといって喜ぶだろう」

でも、ことはまったく逆に進んでいきました。子供たちと集会に集うほどに、ますます私はカトリック教会こそが異端だと確信を持ったのです。

私たちは同じ町に住んでいたので、一緒に礼拝に出席して、子供たちはその間、日曜学校に通っていました。私は、自分が新しく生まれ変わった日曜日のことを忘れられません。最初に読まれたみことばはこれでした。

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。

だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。

（ヨハネ　10・17～18）

ドイツ語では、最後の文はこんな意味です。「この能力と力は、わたしの父がわたしに与えてくださったのです」

私の心の深いところに気づかずにあった疑問が解けました。この時まで、私はこう思っていたのです。「もし、イエス様が本当に神様なら、死ぬはずはない。神はどんな状況においても、生きているものだ」

でも、やっとわかったのです。人間がイエスを殺した

8人の証し

Unser HERR lebt

のではなく、イエスが、ご自身の権威において十字架にかかられたのだ、と。

さらに次のみことばも読まれました。

キリストは聖なるものとされる人々を、一つのさげ物によって、永遠に全うされたのです。

（ヘブル　10・14）

私は生まれ変わりました。

人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

（2コリント　3・16〜18）

三十三歳で、私は洗礼を受け、このみことばをいただきました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

（箴言　3・5）

振り返ってみると、私は、私の日々の生活に主の足跡を見ます。私は、すべての状況において、主がご自身のご臨在を私に知らせようとしておられることがわかります。

三十六歳で、私は、メットマン集会の住み込みのホームマザーとして奉仕するよう召命を受けました。

それにまた、私の宿の用意もしておいてください。

（ピレモン　22）

二十八年間、そこで主に仕えることを許されました。子供達の間で働き、福音を伝えることは大きな特権でした。多くの子供達がイエス様に心を向けることができました。

夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多い…。

（イザヤ　54・1）

私は、私の主、救い主をあがめます。主が私を探し求めてくださり、よき羊飼い、イエス様が、彼に従うよう、私を呼んでくださり、そのみ声を理解できるよう助けてくださいました。

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。

（ヨハネ　10・27〜30）

三年前、私の末の息子アレクサンダーが突然、思いがけなく天に召された時、私はこのみことばを経験することを許されました。誰も、また何物も、私たちを主の御手から奪うことはできません。主の御手は強い愛の御手であり、傷ついた心を慰め、祝福してくださいます。

アレクサンダーは三十三歳になったばかりでした。その息子たちは三歳と二歳半。その妻は三十二歳でした。

電話を受けた時、私はとても耐えられないと思いました。ただ一つのことだけはできました。私の痛みを持ってイエス様のところへ行くことでした。そして私は学び

ました。私の羊飼い、イエス様は私の感情に限界を設けておられる、主は主のみ名を輝かせられる、特に悲しみの時に、と。限界と境界はドイツ語ではほとんど同じ言葉です。ですから私にはわかりました。

わたしは砂を、海の境とした。越えられない永遠の境界として。波が逆巻いても勝てず、鳴りとどろいても越えられない。（エレミヤ　5・22）

あなたは、私のさすらいをしるしておられます。どうか私の涙を、あなたの皮袋にたくわえてください。それはあなたの書には、ないのでしょうか。（詩篇　56・8）

私は、ヨシュアが人々に聖なる地を分け与えた時のことを思いました。それはきちんと測られていて、人々はそこに住まなければならなかったのです。そして、彼らはそれを神の手から受けとらなければなりませんでした。

測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。（詩篇　16・6）

私は再び私の運命を神のみ手から受け取る決心をしました。そして、その時、まったく私の考えからではなく、私の心は歌を歌い始めたのです。私は、私の内側の声が歌っているのを聞いたのです。

主はなんと偉大なのでしょう。
私と共に歌いましょう。
主はなんと偉大なのでしょう。

その後、また別の歌が、私の心の奥でコーラスとして聞こえました。

礼拝のために、私はここにいる。
頭（こうべ）を垂れるために、私はここにいる。
あなたこそ主！　そう申し上げるために、
私はここにいるのです。

それから私は新たに知ったのです。私の天の父は、私に間違った土地をくださったのではなかった、と。悲しみの山の後ろに大きな祝福が隠れていたことを経験したのです。今、私はこれが、新しい土地を手に入れるための最初の一歩だったことがわかります。

二〇一五年、私は背骨の手術を受けなければならなくなり、仕事を辞めることになりました。その二日前には、大変な洪水で集会の建物の一階、二階が水浸しになり使えなくなりました。こんな風にして、私は自分の奉仕を取り上げられたのです。私はどこか他のアパートを探すようにと言われました。

その半年前、新しい法律ができ、老人施設で介護者が求められていました。そこで、私は再び学校へ行き、お年寄りを慰めることがどういうことかを学びました。

老人ホームへ出向いた時、そこのリーダーの方が、聖書を持ってきても構いません、と言いました。私がどんなに感謝したか想像できないでしょう。

あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる。（エレミヤ　1・10）

主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。

私たちは、知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現われ、大雨のように、

8人の証し　Unser HERR lebt

私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。
（ホセア　6・1〜3）

私たちの天のお父様は、奉仕者を選ばれる時、まず、私たちを引き抜き、そして引き倒されます。主は滅ぼし、壊されるのです。しかし、それから、主は再び建て、そして植えられるのです。

私が新しい奉仕を始めた時、私はまず一人のお年寄りに会いました。誰もその人をどう扱ったら良いか分からず困っていました。彼の部屋に入りますと、彼がベッドに横たわっているのが見えました。過酷な人生に疲れきっている様子（ようす）でした。こんな場合、私はお年寄りの隣に身を屈（かが）めて座り、口をその方の耳のそばに寄せ大きな声で話しかけます。心の奥で、イエス様に何をして、何を話すべきかお示しくださいと祈ります。その時、私は彼が小さな声で私に言ったことが理解できたのです。彼は、昔ロシアの炭鉱で働いていたのです。私は言いました。「地下で働くのは危険なんですよね。良き羊飼いを知ることが一番ね」と。

突然、彼の顔に涙が流れました。そして、私の手にキスしようと、手探りしているのに気づきました。その時、私はキリストにある兄弟を見つけたとわかったのです。それで、私は詩篇23篇を読み、「神は愛なり。主は私を贖（あがな）われた」と歌いました。すると、その老いた兄弟も歌い出しました。

三日間、私は彼を訪問することを許されました。でも、私は翌週また学校へ戻らなければなりませんでした。私が戻った時、同僚が言いました。「あなたはあのお年寄りに何をしたの？彼は随分良くなったのよ。私たちは彼をベッドから降ろして、車椅子に乗せることができたのよ」。そこで私はみことばを紹介して、良い知らせが体を元気にすること、また、福音という言葉は良い知らせという意味であることを話しました。

目の光は心を喜ばせ、良い知らせは人を健やかにする。
（箴言　15・30）

神は、そのみことばを成就してくださいました。衰弱していた老人は再び元気になったのです。私はホームにもっと聖書を持っていくことを許されました。すべての介護者がギデオンの聖書を受け取ってくれました。同僚たちは、「どのみことばがお年寄りを力づけるの？」と聞いてきます。興味を持たれれば、ホームの住人にも聖書をお渡しすることを許されています。

主は、もう一つのみわざを私の父の上にしてくださいました。父が認知症にかかってから、私はメットマンに父を連れてきて、私が働いている老人ホームに引き取りました。父は自分から福音を聞きたがるようになり、私の祈りに合わせてイエス様に祈るようになりました。

父の最後の十二時間は特別でした。最後の夜、父はバイオリンの音が聞こえると言って、部屋の中をうろうろ探していました。私には、父がすでに天国の音楽を聴いているように思われました。次の朝、彼はきちんと身なりを整えて言いました。「今日、私は行くよ。私は死ぬんだよ」。看護師は、父の呼吸が変化していることに気づきました。でも、父は、「心配しなくていい。喜んでくれ。私は今日、みんなと別れて、天国に行くんだよ」。その午後、父はコーヒーとケーキをいただき、そして「もう、寝たい」と言いました。呼吸器が用意され、父は眠りに落ち、五分後には召されていました。これを聞いた人々は皆、「そんなふうに私も死にたい。あなたのお父さんの最後の時を見せていただいたのは、素晴らしいことでした」と言いました。ある老人は私に、イエス様についてもっと話してくれと言いました。

8人の証し
Unser HERR lebt

これで、私の証しを終わらせていただきます。大祭司イエス様の祈りをもって締めくくりといたします。

正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。

そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。

それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。

（ヨハネ　17・25～26）

（注1）旧・新約聖書あわせて66巻の文書以外にいくつかの文書を含むもの

（注2）いわゆる正典とされているもので、集会でも使用しているもの

ローザ・グラスホーフ

一九五二年五月八日、ドイツ、デュースブルグ市に生まれる。

一九七二年からケルン・ボン空港の運送会社に勤務。

一九七六年から一九八一年までデュッセルドルフのサベーナ航空会社勤務。

一九七七年、結婚。

一九八七年から二〇二五年までメットマン集会のハウスマザーとして勤務。メットマン集会の子ども及び青少年の会の指導者も務める。

二〇二五年からメットマンの老人ホームで勤務を始め、現在に至る。

子どもは二男一女（ユルグ、ミヒャエラ、アレックス（二〇一四年十一月召天））。

主の憐みと恵みの中で

岩城　陽子



中央が陽子さん、夫の研介さん、長女のかおりさんと

私は一九四九年神田の竹町で父・砂山義雄、母・タミの長女として生れました。父は会社員、母は専業主婦で、四歳年上の兄と私の四人家族でしたが、父親の転勤で新潟に移り住み、幸せに過ごしておりました。

小学校三年生のとき、父が四十二歳で突然出張先で召され、生活が一変しました。新潟での生活が維持できなくなり、母の兄弟を頼って東京の親戚の家にお世話になることになりました。親戚とはいえ共同生活は大変苦労もあり、幾度となく転居を繰り返し、転校も余儀なくされました。

兄は、言葉の違いや田舎と都会の学業レベルの違い、カルチャーショックと戸惑い、といったことから苛（いじ）めの対象にもなり、また一方で、母子家庭の中での母の期待感に対する責任感やプレッシャーから、心が次第に壊れていきました。兄は家庭内暴力、精神病院への入退院を繰り返すようになりました。

小さい頃は優秀で優しく、私が苛められていたら

真っ先に庇(かば)ってくれる自慢の兄だったのに、いつしか兄がいると争いばかりで、なぜこんなことがおこるのか、なぜ普通の家庭のように穏やかで明るい家庭生活が送れないのか、何のために兄は生まれてきたのか、いくら考えても答えは見つからず、今思い返しても胸が詰まります。十代の私は多感な時期でもあり、家庭内事情を誰かに打ち明けたり、話したりすることもできず、大変苦しい思いをしました。このような苦しみの中で、漠然としてですが、何か大きな存在に縋(すが)りたい思いがありました。

ああ、できれば、どこで神に会えるかを知り、その御座にまで行きたい。（ヨブ　23・3）

兄のことで悩みは尽きませんでしたけれども、私の短大時代、ＯＬ時代は穏やかな日々を送りました。そんな中で一九七三年にＩＴビジネスショウで主人(研介)と出会い、翌年に結婚しました。二人の娘にも恵まれ穏やかな生活でしたが、私が四十二歳のときに子宮筋腫となり、全摘手術という肉体的試練が与えられました。

病院の同室に吉祥寺集会の清水靖子姉妹がおられ、三週間ご一緒に過ごしました。清水姉妹を通して相模大野の家庭集会に導かれ、初めてベック兄とお会いし、兄のことを話したところ、「お兄ちゃんは貴女が思うほど苦しんではいないと思う」とおっしゃった言葉に私の心は初めて軽くなり、何か温かさを感じました。しかし、そのときはまだイエス様を求めていませんでした。

兄の病状は回復せず、精神病院への入退院を繰り返しておりましたが、今度は母が認知症という試練が与えられました。ここで母のことに少し触れさせていただきます。母は三十九歳の若さで未亡人となり、二人の子供を抱えて大変な苦労と孤独の中で頑張って兄と私を育ててくれました。気丈な母だけに友達付き合いもほとんどなく、兄と私のためにだけに生きた人でした。母の認知症が進み、兄の精神状態も限界になり、遠方にいては、都内に住む二人を見守ることは困難になり、目の届く所へ転居することになりました。

認知症が進むにつれて、次第に母は話すことも状況を理解することもできなくなり、特別養護老人ホームに入所することとなりました。兄と私は度々(たびたび)母の許を訪れて見守っておりましたが、突然兄が倒れ、胃を全摘する大手術となりました。

兄の顔が浮腫でパンパンに腫れあがり、余りの痛々しさに何も言えず胸の詰まる思いで泣いておりましたら、兄は穏やかな表情で「皆(みんな)大げさなんだよ」と自分の苦しみや不安から解き放された言葉だったのには驚きました。今思えば、そのとき兄は既(すで)にイエス様の御手の中にいたのではないでしょうか。

それから程なく二〇〇五年十月二十二日、六十歳で、眠るように静かに天に召されました。召された後に、次のみことばが与えられました。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・18）

遺品を整理している中で、兄の走り書きのメモが見つかりました。「母に代わって陽子さんが、全面的に兄義和を看てくれてありがとう」と綴られており、この二言から、兄の真心と愛情とへりくだった心を知り、天国へ行ったことを確信しました。

こんなにイエス様から恵みと祝福を与えてくださっているのに、私はまだイエス様を求めていませんでした。母の認知症は一層進んでいきましたが、最愛の息子である兄の死は、母を悲しませるだけだと思い、この事実を知らせませんでした。ホームには兄弟姉妹

が幾度となくお越しくださって、お祈りと賛美をしていただく中で母は次第に平安に満たされ、本当に理屈ではなくイエス様を肌で感じるようになってきました。涙を浮かべ手を合わせて喜んでいたそのときの母の姿が、今でも目に焼き付いています。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ　43・4）

二〇一二年十二月十八日、老衰で九十三歳の天寿を全うしました。年が明けた一月十日、吉祥寺の集会所でベック兄を初め大勢の兄弟姉妹が参列してくださり、賛美に満ち祝福された葬儀となりました。何も解らない私たちを支え助けてくださった兄弟姉妹がたのご奉仕、そして何より、すべてを満たしてくださり最善へと導いてくださったイエス様に心から感謝しました。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。（詩篇　138・8）

話は前後しますが、本気でイエス様に助けを求めるようになりましたのは母の死の五～六年前、長女かおりに問題が起こったことからです。当時ＯＬだったかおりは、限界を超えて仕事に没頭し、心労で勤務を続けられなくなり、止むなく退社しました。兄のこともあり精神科に不信感を持つ私は、娘を治せるのは医者ではないと感じ、集会の姉妹に相談したところ、すぐに家庭集会に導かれてベック兄とのお交わりが与えられました。

ベック兄は「おめでとう、砕かれて良かったね」とかおりを抱きしめてくださいました。娘は何が何だか分からないようでしたが、暖かい手の中でただただ泣いておりました。その後すぐ、集会の兄弟が経営するパン屋（リンデ）で働かせていただくことになり、兄弟姉妹のお祈りに支えられ、少しずつ心が軽くなって行ったように見えました。

娘は、イエス様とは付かず離れずのような状況が数年続き、元気を取り戻したとき、趣味の漫画を描き始め、その作品を投稿したところ、出版社の目に留まり漫画家としてデビューすることになりました。

掲載される漫画が増えるに従い出版社からの要求が増し、腱鞘炎という物書きにとって最悪の試練が与えられました。かおりは日夜苦しみ、もがきながら描き続けておりました。徹夜続きの日々で追い詰められ、私の知らないうちに心療内科へ通っていて、気が付いたら大量の薬漬けとなって何も考えることができなくなり、漫画家を断念せざるを得なくなりました。

そんな娘の様子が生前の兄と重なり、兄と同じようになってしまうのではないかと恐怖と絶望を覚えました。大切な家族なのに私はあまりにも無力で何もできないことを思い知り、初めて心からイエス様に助けを求めました。そんなとき、かおりも初めて自分から「私はもうもたない、イエス様の所に戻りたい、受洗したい」と心からの叫びをあげました。

かおりは自ら神澤姉妹に助けを求めたところ、「明日、御代田にいらっしゃい」と言われ、慌てて支度をして、私も付き添いで御代田に行きました。センターに着いたときに、目の前にベック兄が立っておられ、主のご計画を目の当たりにしたようでした。かおりが「受洗したい」とすがっている姿を見た瞬間、私も心の底から受洗したいと思いました。

「私も受洗したいのですが‥」と恐る恐る尋ねたところ、ベック兄は一瞬厳しいお顔をされて「あなたは受洗の資格があると思いますか?」とおっしゃったので、「まったくありません」とお答えしたら、ベック兄は「充分にありますよ」とにこやかに答えてくださいました。その夜に母娘共に受洗の恵みをいただきました。二〇〇六年八月十二日でした。

8人の証し　Unser HERR lebt

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。（マタイ　7・7）

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

不思議なことですが、かおりがリンデを辞めて以来、一度もお会いしていなかった藤本兄が受洗の場にいらっしゃったことには本当に驚きました。「かおりをリンデで働かせていただけないでしょうか？」とお願いしたところ、快くお受けしてくださり、再びリンデで働かせていただくことになりました。

受洗後も、娘は薬物依存で大量の薬を飲んでいることに大変悩んでおりました。まもなく過去に同じ悩みを持った経験を持つ兄弟とお交わりをする機会を与えられました。娘と二人で真剣にお祈りした結果、娘は薬を止める覚悟を決め、「もう薬に頼らない」と言って震える手で全部の薬を私に手渡してくれました。その後、薬が完全に取り去られ、かおりは初めて吉祥寺で自活することになりましたが、体力も精神力もかなり弱っている娘を手離すのはとても不安でしたけれど、すべてをイエス様におゆだねすることにしました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

受洗してからの十年、かおりは、主と兄弟姉妹方には言葉では言い尽くせないほど助けていただき、祈っていただき心から感謝しております。リンデでは十年働かせていただき、心身ともに成長し健康になりましたが、新しい目標を目指し一昨年十二月でリンデを退社させていただいております。

私自身も受洗からすぐに祈り会に導いていただきました。我の強い自分勝手な者ですけれど、いつも大らかに私を受け止めてくれる主人、そして主にある兄弟姉妹に助けられ励まされて現在に至っております。

私は家族の問題に悩み、苦しみを通してイエス様に救われてきましたが、今回の証しの恵みに導かれたことで、初めて本当の自分の心を知りました。幼い頃から家庭の争いの中で、母からいつも「陽子は希望の星」と言われ続け、私だけでも良い子になってと兄の分も頑張って、表面上は明るく過ごしていました。しかし本当の私は、異常な家庭生活のため、とても不安定でコンプレックスの塊であったのに、何が苦しいのかも分からず、現実から逃げ続けていたのです。イエス様に出会い、初めて自分がとても傷ついていたことを知りました。傷ついた私の心をイエス様は家族の問題を通して一つひとつ明らかにして、そのたびに癒してくださり、絶望から希望へと変えてくださいました。

神の恵みによって、私は今の私になりました。（1コリント　15・10）

主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方・・・（ヤコブ　5・11）

歩みののろい者ですけれども、イエス様の導きと御声に従って、悔い改めて歩みたいと思います。そしてまだ救われていない家族や友人知人、お一人おひとりの救いを祈っていきます。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなた

の家族も救われます。（使徒　16・31）

岩城陽子（いわきようこ）
一九四九年　東京都台東区で生まれる。区立杉の森中学、日本大学第二高等学校、東京成徳短期大学英文科卒
（家族）
夫　研介（けんすけ）
長女　かおり
次女　亜矢子（あやこ）既婚

「滅びの穴」から救ってくださったイエス様

大場　裕之



前列右から2人目が裕之さん、みなさんと

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・2）

私は、父・眞次郎、母・登美子の長男として一九五三年十一月十八日、山形県長井市で生まれ、今から十七年前（二〇〇〇年）、父の死を通して、主イエス様に救っていただきました。

1イエス様に出会う前のこと

私は、少年時代から、何か精神的なものにあこがれていました。そのせいか、現実的なことが苦手でした。たとえば、当時子供たちの間で流行っていたメンコなどの勝負ごとでは、いつも負けていました。そうでありながら、テレビに登場した「巨人の星」にあこがれ、小学生のときから野球少年となりました。しかし、中学校の、夏休みの部活の過激な練習での疲れがきっかけとなり、修学旅行で訪れた鎌倉の宿泊先で真夜中、吐血

しました。近くの病院に担ぎ込まれましたが、瞳孔（どうこう）が開き、死の間際を体験しました。病名は、急性の十二指腸潰瘍でした。それでも野球を続け、高校では甲子園を目指しました。

ところが、それも、父を突然襲ったスモン病（薬害で、胃薬の含有物であるキノホルムによって身体全体の神経が麻痺する病気）で終わりを迎えました。父のスモン病は非常に重く、足のしびれからあっと言う間に全身の神経がマヒし、視力が奪われ、呼吸困難となりました。医者も原因がわからず、母と私は病室の外の廊下で、覚悟しなさいと言われました。また、父も死を覚悟したようです。そのとき、父が私に「ヒロ、聖書を読んでくれ」と語ったのを昨日のことのように思い出します。それまで、聖書のことを父の口から一度も聞いたことがなかったので、そのとき、聖書とは人生の生死にかかわる重要な書物であることがわかりました（このことがきっかけとなり、長井市のバプテスト教会のアメリカ人牧師夫妻とお会いすることになります）。

この病気で、父は四十代で退職に追い込まれ、私は進路を見失ってしまいました。

そこで、東京税関に勤務しながら大学に進学しました。その後、税関を辞め、大学卒業後はインドの大学院に留学しました。帰国後は民間のシンクタンク、その後はイギリスで教鞭をとり、再び帰国し、いまお世話になっている大学で仕事を続けております。

何を目指して生きているのか、という問題に悩んでいた大学時代のことです。二百人以上入る大教室の一番後ろに座っていたとき、遠くにボヤっと見える先生が黒板に三角形のピラミッドを書いていましたが、その一番上にあった「自己実現」という言葉だけが見えました。そのとき、人生で目指すものはこれだと思い込んでしまいました。それで、そのときは、心にあったモヤモヤ感が吹き飛んだのを覚えています。し

かし、実はこれがとんでもない的外れと気づくのはずっと後のこととなります。このときの私は、まさに聖書に書かれてあるとおり、欲望を神としていました。

> というのは、…今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。（ピリピ　3・18〜19）

インド政府の奨学生として、自分なりの理想を持ち自己実現のために留学したインドで、待ち受けていたのは苦難の連続でした。摂氏五十度近くになる気候。超ハードな大学院の勉学。そして一筋縄ではいかないインド人。留学してからの初めの三か月で十キロも痩せ、髪が茶色と白髪（しらが）となりました。一年後には、現在の妻である姉妹も同じ大学院に留学して来ました。しかし、妻はマラリヤと肝炎となり、続いて私も肝炎になりました。さらに、論文作成は悪戦苦闘の連続であり、また、追い打ちをかけるように留学後の就職先もまったく見えず、まさにお先真っ暗で自暴自棄（じぼうじき）の状態で、当時住んでいた学生寮の部屋の壁に頭を打ちつけたことも思い出します。このような辛い状況の中で、妻が病気になりながらも労苦を共にし、献身的に支えてくれたこと、頭が下がります。感謝です。

そんなとき、日本にいる恩師から、「大場君、自暴自棄となるな」という手紙が届き、その言葉に励まされました。（確かこの恩師からだと思うのですが）「丘の上の小石」の話を聴きました。恩師は二人おりますが、この恩師は、すでに天に召された恩師で（これもずっと後になってわかったことなんですが）ベック兄との交わりもあり、吉祥寺のベックご兄姉宅で夕食も共にされた方です。

「丘の上の小石」とは、次のような内容です。小石が丘の上にあったが、風に吹かれて丘の上から転げ落ちてしまった。そして、丘のふもとにあった沼にポトンと入り、そしてズブズブと沼の底まで沈んでしまう。しかし、ここまで来たら、この小石は、あとは上がるだけなんだよ。

この話を聴いたとき、とてもつらい状態だったので、なぜかラクになり、励ましを受けたことを今でも思い出します。けど、この小石の話の真意がわかるのはイエス様に出会ってからのことで、それもつい最近のことです。

2イエス様との出会い

今から十七年前の二〇〇〇年の五月十六日、スモン病の父が召されました。七十八歳でした。父は、埼玉県朝霞市にある養護施設で療養しており、この施設で召されたのです。召される二か月前に、ベックさんが野田姉妹の運転するクルマで施設を訪問して、父に会ってくださいました。父は頑な態度でしたが、ベックさんは、「お父さん、救われるのは難しくないよ。ごめんなさい、ありがとう、これからもよろしく、とイエス様に言えばいいんだよ」と優しく、語ってくださいました。

この父の死を通して、「救い」が私にも与えられました。亡くなる一週間前には元気な父を見ていたので、ショックのあまり床から起き上がることもできず、さらに葬儀のやり方で弟と対立するなど、とても辛いときでした。遺言もない。そんなとき、聖書が目の前にありました。なぜ父が亡くなったのか、聖書をみてもわかるわけがないと思いながらも聖書を開く。父が亡くなった五月十六日を頼りに、聖書にある六十六の文書のそれぞれの5章16節の箇所だけを読んでみました。しかし、わからない。父の葬儀の日、浦和の家庭集会でベックさんにお会いしました。ベックさんに5章16節の話をしたら、ニコッとして「それは、テサロニケ人への手紙第1（にある5章16節）だよ」と語ってくれました。急いで、その箇所を開いてみると、「いつも喜んでいなさい」とありました。でもそのときは、父の死や葬儀のことで、とても喜べる状態ではありませんでした。聖書を捨てようとさえ思いました。

しかし、それから二週間後、依然として辛い状態でしたけど、市川集会での礼拝中に、再び同じ言葉が示されました。今度は「いつも喜んでいなさい」という言葉がイエス様の「声」として聞こえてきました。なぜなら、（あなたがどのような状態のときでも）「わたしがいつもそばにいるから」と。その瞬間、理由もなく、涙がドッと出ました。辛い中でも、喜びが心の底から湧きあがりました。これが、私の「救い」のときでした。そして、これまで体験したことのない平安が与えられました。自分の小さな理性とか感情では到底測り知ることのできない素晴らしい体験です。主の一方的な憐れみと恵みに心から感謝しました。

3イエス様と出会ってからの祝福された人生

この救いの体験は、私の生まれつきの性質は自らが神になりたいというものであり、それこそが罪である、という真実に目が開かれたときでもありました。ですから、イエス様との出会い、救いは、限りない喜びでしたが、同時にありのままの自分と向き合うときともなりました。母は、父が召される十四年前に六十二歳で、父の介護疲れから自らいのちを断ちました。母のそばにいなかったという良心の呵責。そして、二人の弟に対する負い目。また、自分の我儘や自己愛から妻を孤独にし、苦しめてしまったことがはっきりと示されました。これらは自分の恐ろしい罪として、重くのしかかってきました。

しかし、イエス様との出会いによって、真っ暗な心が光に照らされ、自己実現をひたすら続けてきた道は、実は罪の道であり、滅びの道であることに気づかされました。このような自我のかたまりであり、自己中心

でどうしようもない我儘な自分のために、イエス様がその身代わりとなって罰せられ、十字架上で肉が裂かれ、尊い血を流してくださったこと。この理解を超えた真実の愛を体験的に知り、自然と頭が下がり、ごめんなさい、そして、ありがとうございます、と心から悔い改め、感謝する日々へと変えてくださっております。

冒頭の詩篇103篇のとおりです。

イエス様が良くしてくださったことは測り知れません。頑な自分を砕いてくださり、生まれながらの自分に絶望し、イエス様に希望を持つようにしてくださっていること。そして、四人の素晴らしい娘たちを与えてくださった結婚生活も、のろいから祝福へと変えてくださったのみならず、今与えられている仕事も祝福してくださり、祝福された人生へと変えてくださっております。

今から三年前（二〇一四年一月二十四日）に、主は、私が勤めている千葉県柏市にある大学にベック兄を送ってくださいました。ベック兄は、以前この大学でドイツ語を教え、図書館で聖書を学ぶ会を持たれ、学生たちにイエス様を紹介されておりました。そのベック兄から、一言、「ここに来たのは、無駄ではなかったよ」、と語られ、一瞬ドキッとしました。

ベック兄は、この日、「死は終わりではない」というテーマで、力強くメッセージを語られました。会場を埋め尽くした百名ほどの学生や社会人の方々が福音の恵みに与ったのみならず、これをキッカケに、聖書を読む会が立ち上げられました。毎週木曜日朝、この会が持たれ、そのとき参加された方や、アフリカからの留学生も主が導いてくださり、祝福されております。

またイエス様は、毎週金曜日、春日部のご兄姉宅で行われる祈り会にも導いてくださっております。この祈り会は、この世という戦場にいる者にとっては、主からいただいたオアシスのようです。

兄弟方の熱心な祈りの輪に加えられ、祈りを通してイエス様と一つとなるだけではなく、主にあって一つとされる素晴らしい恵みをいただいていることも感謝です。

今、人生は死で終わるのではなく、主イエス様と一つとなること、そして、主イエス様のご栄光のために、今生かされていることを確信できることも感謝です。

先ほど、イエス様に出会う前に示された、「丘の上の小石」の説き明かしは神のことばである聖書にあり、神の愛そのものであられる主イエス様でした。

私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。（詩篇　40・2）

小石とは我儘でかたくな自分です。その自分に依存し、自己実現することで、この世という「風」を受け、自ら丘から転げ落ち、罪の泥沼に沈んでしまっている自分。そのような罪の泥沼にいる自分のために、イエス様が代わりに罰せられ、十字架上で身代わりとなって死んでくださった。このイエス様の犠牲の愛によって、罪が取り除かれ、罪という債務証書がチャラとなり、マイナスからゼロとなり、罪の赦しを受けている。そればかりではありません。イエス様は十字架の死のあと、墓、つまり「滅びの穴」に下りましたが、そこから、よみがえられたことによって、「永遠のいのち」を与えてくださり、日々新たにしてくださっている。つまり、泥沼の底にいた小石のような自分を引き上げてくださったのは自分の努力などではなく、すべてイエス様です。

今生きておられるイエス様の御手の中で、小石は守られている。同時に、イエス様から目を離さないようにと、日々訓練され、砕かれ、天の御国を目指して、成長・成熟するようにと、御霊様が助けてくださっています。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あな

たは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。（イザヤ　38・17）

私の神、主よ。私があなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。主よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。（詩篇　30・2～3）

祈りを通して、自己実現の判断軸である「自分はできる」から、日々、解放していただき、イエス様を信じる信仰によって、敬愛する兄弟姉妹とともに、生かさせていただいていることを心から、感謝いたします。

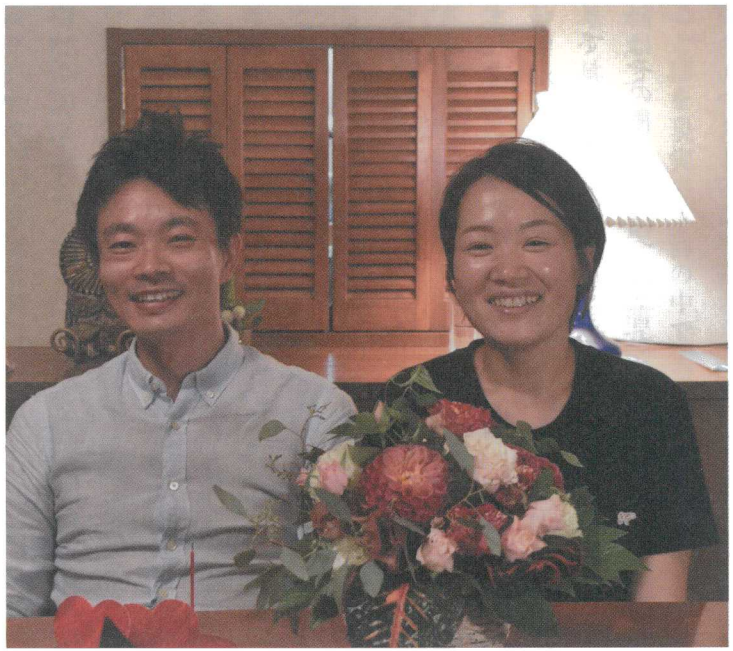
わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。（詩篇　103・1～5）

大場裕之（おおば・ひろゆき）
一九五三年十一月十八日、山形県長井市生まれ。
米沢興譲館高校、早稲田大学社会科学部卒、ジャワハラル・ネール国立大学院大学卒。現在、麗澤（れいたく）大学勤務。
妻・千鶴子、子供四名。

主とともに生きる

岡本　恵以



妻の江里子さんと

1 主との出会い

あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは「私は聞かない。」と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。（エレミヤ　22・21）

イエス様に無関心でいた私にとって、歩みが大きく変わり始めた原点は妹の死でした。彼女が二十年で人生の終りを迎えるのを目の前にした時、本当に何もかも虚しくなりなりました。その時没頭（ぼっとう）して打ち込んでいたものも手につかなくなり何の魅力もなくなりました。世の中の何も自分の活力にはなりませんでした。

聖書の伝道者の書に、「空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。」（伝道者　1・2～3）とありますが、そのものでした。

その虚（むな）しさを満たすことのできるものを探したけれど見つからず、そのような心の問題を友人はもとより家族とも共有することができないと知った時、虚しさに孤独が増し加えられたようでありました。

そのような私でしたが、それからのちにイエス様の十字架を信じる信仰が与えられました。聖書に書かれているとおり、イエス様は私の罪のために十字架にかかって死んでくださったこと、葬（ほうむ）られたのち三日目によみがえられたこと、天に上られ今も生きておられる主なる神様であることを疑いなく信じるようになりました。そして、死は終わりではないという確信と希望も与えられました。その歩みについては過去の「主は生きておられる」にて証しさせていただいていますので今回はその後の歩みについて書かせていただきます。

2 主の十字架

私の信仰の出発点は、イエス・キリストを十字架につけたのはこの私だと思わされた時であります。それからイエス様のことを知るにつれて、この方に従い歩みたいという願いも持つようになりましたが、時を追うごとに自分自身の惨（みじ）めさを知るようになりました。

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。・・・キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。（ガラテヤ　5・22～24）

聖書には、イエス様を信じる者のうちには御霊が住んでくださるとあります。ですからキリスト者とはまさしく御霊の実を持ち合わせている者だと思っておりました。そして情欲や欲望から離れ清く生きる。キリスト者として成長するとはこのような者に変えられていくことであると信じていました。

しかし、そのような歩みのなかで、命をかけて救い出してくださったイエス様のご愛を知らされました。その時のことは今でもよく覚えております。それは私がまさに自分の不信仰・不従順・不品行により、その罪悪感を自分でもごまかすことができなくなり押しつぶされそうになった時でした。その日、世の誘惑に翻弄（ほんろう）される自分を見て惨めな思いでいっぱいになり、本当に消えてなくなりたいと思いました。自分には信仰もなければ御霊も与えられていないのではないか、救われていないのではないか。暗い底なしの穴に落ちていくような恐ろしい感覚でした。その時、心に語りかけられるように言葉が差し込んでまいりました。

「なぜ、あなたは死のうとするのか」

「私はそのあなたのために自分の命を捨てたのだよ」

それは聖書を通してずっと知らされてきた、イエス様の思いであり語りかけでありました。もちろんイエス様が自分の罪のために十字架にかかられたことしかしながら現実はそうではありませんでした。御霊の実どころか相変わらずの性質を見せられ、みことばを現実の生活の中で実行することができず、かえって肉の欲に支配されてしまう歩みでした。そのような自分を見る時、とてもイエス様に喜んでもらえるような信仰者とは言えない、といつも自分で自分を責めるようでした。本当に悲しい思いになり、いつも罪悪感を心のうちに持つようになりました。

清く生きたいと願い決心し、少しばかりうまく生きていると思っていると、再び同じ性質を見出すのです。それはまるで、階段を登っては落ち、登っては落ち、を繰り返しているように思えました。そればかりか、そのうち段々と深い穴に下っていっているような気すらしていました。汚れたもので満ちており変えることのできない自分を見せられ、心の内に重たいものがいつも横たわっているようでした。そして何度も同じ過ちを繰り返す自分に絶望的な思いがありました。